

桜町天皇譲位・桃園天皇受禪における渡辺始興らの屏風絵制作について

福田 道宏（奈良県立万葉文化館）

近世の絵師にとって最も格式の高い御用のひとつは、禁裏御所をはじめとする御所における御用である。徳川政権下初期の造営では江戸の幕府御絵師狩野家一門が重要な御用を独占しており狩野派の覇権を示すものとされ、それに対し、同じく最後から二番目の寛政度造営では住吉家による賢聖障子を除き幕府御絵師の参加はなく、ほぼ全ての障壁画を京畿内の絵師でまかなっており京都絵師の興隆と狩野派凋落を示す画期とされるなど、御所造営およびそこでの絵画制作は近世絵画史の上でも注目されてきた。

そうした先行研究に採り上げられてきたのは初期を除き、主に罹災焼失による大規模な再建造営であった。大規模造営は資料も豊富で、藤岡通夫『京都御所』など建築史ほか隣接諸分野による研究の蓄積もあって、具体相も明らかにし易い。しかし、近世を通じ、多くの天皇が在位し、そのたびごとに立坊や、譲位・踐祚・即位があり、東宮・仙洞・女院御所の造営や、屏風や衝立を含む調度・道具類の新調が行われ、絵師も動員された。徳川政権下、在位した天皇は後陽成から数えると明治まで16代に及ぶ。こうした立坊・譲位・踐祚に伴う、小規模造営や調度新調はほとんど採り上げられることすらなかった。本発表では近世、御所の小規模造営・調度新調について、二、三の実例をもとに具体相に迫りたい。

近世の宮廷に関する文献資料にはまだまだ未紹介のものが多い。公卿や地下官人の家に伝来した資料群を調査するなかで、しばしば小規模造営・調度新調の記事が含まれているのを目の当たりにしてきた。そこで本発表では、こうした未紹介資料のなかから、特に延享年間、桜町天皇から遐仁親王（桃園天皇）への譲位に際する絵師の御用を中心に、ほかの小規模造営・調度新調を比較材料にして、断片的にでも追いかけて、その様相を明らかにしたい。延享度の譲位では、桜町院と、これから踐祚しようという桃園天皇の禁裏御所のため、様々な調度が作られたが、そこには絵師も動員された。このとき参加したのは土佐光芳・鶴沢探鯨・山本宗川・海北友泉・狩野正栄・望月玉仙や渡辺始興らであった。なかでも彼らのなかでは先行研究がまだしも豊富な始興の、比較的晩年に位置するこの画業については、これまで全く触れられたことがない。のみならず、このとき描いた屏風の一点「押絵形御屏風」こそが、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵《四季図屏風》であろうと考えられ、制作年と制作背景を特定できる作例として、彼の作品中でより重要性が増すことになる。

大規模再建造営はたとえば徳川政権下の最後の三回を見ても宝永度から寛政度まで約80年、寛政度から安政度まで約70年の隔りがある。そのため、その端境期で造営に巡り合わなかった世代の絵師が少なからず存在する。宮廷画壇という観点からは、端境期はほとんどそのまま空白地帯となっている。本発表を空白を埋める第一歩としたい。